

---

# 輪廻戦記

豊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

輪廻戦記

### 【Nコード】

N0663D

### 【作者名】

豊

### 【あらすじ】

時代は仮想146年、当時の大国、覇国の村に碧眼赤髪の赤子が産まれた。その赤子が成長し、天下を分ける人間になることに……

## 第1合 生誕（前書き）

暇な時に少しずつ書いた物です。

## 第1合 生誕

仮想146年春

人類が生まれてまだ間もない頃、ここ倭はいくつもの国に別れ、各国はより良い土地を求めて、他国を攻めて領土を、増やそうとしていた。

その国の1つ、覇国は大国でありながら、各村の統率に欠け、内戦も度々起きているという危機に晒されていた。

と言うのも、今の国王、才和は2代目で、初代才霸の息子なんだが、父が偉大すぎて愚君と罵られた挙げ句、各村長が独自の政治を行い始めるということにまで、発展していて、もはや再建は不可能と言われた。

そんな才和が住んでいる村、霸叉村に村中を蒼然とさせる事件が起きた。

その事件とは、ある女性が産んだ子どもが犯人だ。

碧眼赤髪、さらに泣き声をあげず目をはつきりと開けて生まれてきた。

ある村人は神の子といい、またあるものは悪魔の化身と言った。

悪魔の化身、そう言われたのには深い訳がある。

産まれた直後、母親が死んだのだ。

これを吉と取るか悪と取るか。

それで霸叉村は2つに割れた。

元々霸叉村には覇国全体の3分の1の人が住み、覇国全体の食料がここに集まってくる。

それだけ大きい村なのだが、この赤子が生まれたことにより、半分以上他の村に移り住んだ。

残ったのは必要最低限の人員と才和のみ。

重臣は他の村に移った。

内政は潤っているが、人材に欠ける。

それは大国に付き物の悩みである。「はて、どうした物か。」

才和は困り果てた。

知将おるか、勇将も1人もいない霸叉村。

運命を分ける1つ目の道が前に現れた。

「赤子を殺すべきか否か。もし殺せば、今度は私が殺される…。ああどうした物か……。」

大きな家の中を右往左往する才和。

それに見兼ねた母君が才和の頬をひっぱたいた。

「何を迷うておるのですか！ それでもあなたは才霸の世継ぎですか！」

母君の言葉は才和の心に大きく響いた。

霸王としての品格を忘れていた才和。

霸王を間近で見てきた母君。

才和はうんともすんとも言えなかった。

「母上……。分かりました。あの赤子を山に捨ててきます。」

「それで……後悔しないのですね？」

「はい。」

そう言つて才和は家を飛び出し、側近を連れて、あの赤子が住んでいる家に向かった。

家の中には神の子と崇める村人たちが軽武装して、待ち構えていた。

「才和様！ この赤子を殺すのでしたら私たちは、才和様を斬ります。」

「黙られよ！」

側近2名が前に歩んだ。

軽武装ながらも村人たちとは比べ物にならない。

側近が一步步めば、村人たちは一歩下がる。

とうとう、壁に追い詰められた村人たち。

「さあ、渡されよ。」

「いやじゃあ！」

村人たちは自棄を起こし、才和に斬りかかった。  
瞬時に側近2名が切り捨てた。

鮮血が部屋中に舞う。

もちろん赤子にもかかっている。

そんな中でも赤子は泣かなかった。

赤子を抱き上げ、家を後にする才和。

側近1名を呼んで、

「悠山に捨てて参れ。」

「はは。」

と申し付けて、自身は自宅に戻った。

「赤子は……捨ててきたのですね？」

家の中では母君がそわそわした様子で待っていた。

才和は返事をせずに、個室に籠った。

## 第1合 生誕（後書き）

寒いですね。そろそろストーブの出番ですね。

## No.2

赤子が悠山に捨てられた直後、山にたまたま獵に来ていたが覇国の隣の悠国の村人が赤子を見つけて、指でつついていた。

「こりゃあ、珍しい赤子だなあ。不佐様<sup>フサ</sup>に見せてみよう。」

### 悠国悠山村

悠山村は悠山の山頂にあり、主な食料は魚と動物、そして木の実。人口も国力も覇国とは比べ物にならないが、村人1人1人が勇猛で、更に村全体が城の様になっており、攻めても、一度も落ちたことは無かった。

故に、土地は悪くとも国力は並みに有し、優秀な勇将が多く、人口は少なくとも他国と並みに渡り合ってきた。

さて、あの赤子はどうなったかと言うと、悠国の王不佐の家に持つていかれて、村人の注目の的になっていた。

赤子を見た不佐は思わず唸った。

「ふむ、確かに変わっておるな。」

不佐、及び村人たちは皆注目し、物珍しそうに見ていた。

「長老を呼べ。」

「ここにおりますじゃ。」

長老は不佐の真後ろにいて、じつくりと赤子を見つめて、複雑そうな顔をして、

「不佐や、この赤子を誰にも渡してはならないぞ。跡継ぎにさせるのじゃ。」

「しかし、私には息子が1人いますか……。」

長老は首を振った。



「この赤子は正に神の子。この赤子は捨ててはならん。そして、大事に知略、武道を教えよ。さすれば、悠国が覇国すら食べてしまうであろう。」

それだけ言って長老は家を出ていった。

残った村人たちは複雑な顔をして、1人歯を食い縛って、今のやり取りを聞いていた若干13歳の不佐の息子、不<sup>フリザ</sup>理佐を見ていた。不<sup>フリザ</sup>理佐は顔を真つ赤にして、今にも怒りが爆発しそうだ。

「あんのクソジジイ殺してやる！」

怒り出して、短剣を持って足早に出ていった。

誰にも止めることは出来なかった。

不<sup>フリザ</sup>理佐がああなっとなってしまつてはもはや、今は亡き母親で無ければ、止めることは出来ない。

それほど勇猛な男なのである。

## 長老宅

「ふ、不<sup>フリザ</sup>理佐様お静まり下さい！」

真つ赤な顔で短剣を片手に持って、乗り込んできた不<sup>フリザ</sup>理佐に長老の側近たちは、不<sup>フリザ</sup>理佐の軀を抑えるが、13歳と言えど並みに力を持った不<sup>フリザ</sup>理佐、それに怒りが加わったのだから抑えきれない。

側近たちを放り投げた不<sup>フリザ</sup>理佐は無言で立っている長老を睨み付けた。しかし、一切動じずそれどころか不<sup>フリザ</sup>理佐に威圧を加えていた。

あまりの威圧感に不<sup>フリザ</sup>理佐は一步後退した。

長老と不<sup>フリザ</sup>理佐の間に不穏な空気が流れる。

「不<sup>フリザ</sup>理佐よ……ワシがあのようなことを本気で思つておると思つておるのか？」

「え……？」

いきなりすぎる問いに不理佐は戸惑った。

なんと言えいいのか分からず黙り込んだ。

勇猛な不理佐だが、いきなりの問い掛けにはかなり弱く、軍学もあり得意ではない。

「……儂はな、そなたに文武両道の君になって欲しいのじゃ。

この村で学のある者は儂だけじゃ。

しかし、儂も時間がなくなてな。だからそなたにあの様なことを言ったのじゃ。無礼を許されよ。」

途中から長老は涙をこぼしながら語った。

その涙は無駄では無かった。

聞いている途中に不理佐は心を打たれ、涙を流し、鼻をすすって聞いていた。

勇猛で馬鹿な不理佐だが、感受性が豊かで、情に流されやすい。

あの語りはその特徴を利用した長老の策だった……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0663d/>

---

輪廻戦記

2010年10月28日05時53分発行